



Title	私立学校における4年生対象の英語開講プログラミング授業：戦略的2言語併用で進める学び
Author(s)	松尾, 由紀
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 168-169
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102032">https://hdl.handle.net/11094/102032</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ≪ Column 12 ≫

# 私立学校における4年生対象の英語開講プログラミング授業 ー戦略的2言語併用で進める学びー

キーワード：トランスランゲージング、プログラミング授業、媒介言語としての英語、translanguaging、programing lesson、EMI

## 授業実践の背景

日本のある私立小学校では、プログラミングの授業を英語母語話者と日本語母語話者の教員のチームティーチングで英語開講している。この授業では、レゴなどを使用してロボットの本体を作り、それを動かして実験や検証をするためのプログラムを書くことが児童に課されるタスクとなる。この学校はインターナショナルスクールではなく、またほぼ全ての児童の母語は日本語である。これだけを耳にすると、「小学生に理解可能なのか」と思われるかもしれない。まず大前提として、この小学校では低学年では週2時間、中学年では週3時間の英語授業がほぼ英語のみで実施されていることがある。プログラミング授業以前の3年間の英語学習経験によって、高いリスニング力が育成されており、全ての語彙が理解できなくとも、理解可能な部分をつなぎ合わせて概要を捉える能力に長けている児童集団である。普段の英語授業と英語開講のプログラミング授業の決定的な違いは、前者は言語習得が第一義的目的であり、後者はプログラミングの技術獲得が最終目標であるという点である。この点において、この授業は言語と教科内容両方の獲得を目指す CLIL (Content and Language Integrated Learning) よりも、英語を媒介言語として教科内容を学ぶ EMI (English as Medium of Instruction) と定義するのが最適であろう。筆者はこの教室内での教員と児童の言語使用を観察する目的で約半年の授業見学をした。

## 戦略的母語使用とトランスランゲージング

EMI でのプログラミング授業を理解可能なものにするためには環境の設定が鍵となる。この授業では、英語母語話者の教員が概ね主導で、ロボット制作やプログラムを書く作業の指示、関連する教科内容（昆虫の一生や地震発生のメカニズム等）の紹介をする。この教員は、児童の全体の場合での発言に対する反応や、個別指導の際に投げかけられる質問に対しても、英語で返答することを貫いている。日本語母語話者の教員は、適宜日本語と英語を織り交ぜて説明をしたり、英語だけでは理解不可能と思われる時に補足的な情報を日本語で付け加える。児童は、ペアワークに取り組む際や個別に質問をする際には両方の教員に対して日本語を使用し、全体の場合で発言する際も躊躇なく日本語で返答する（英単語などを織り交ぜながら話す児童もあり、英語を使おうとする意識もある）。この教室内で起こる言語使用で重要なのは、誰の言語使用も制限されていないという点である。教員の英語での発問に対して児童は日本語や英単語で返答し、教員間でも適宜日本語と英語を併用した会話が起これ、その複合的なやりとりで違和感なく授業が進む。児童が日本語での説明を求めることもなければ、教員が児童に英語での発言を促すこともない。英語母語話者の教員が「英語の授業であれば “In English, please!”

と促すが、この授業でそれは適切ではない」とインタビューの中で語っていたことも印象的であった。

さらに、児童に提示される教材にも言語環境の設定の工夫が見られる。学習者に配布されているワークシートは日本語で書かれており、英語で進む授業において学習者の安心にもなり、また振り返り等を記入しやすくするために日本語が選択されている。万一英語での説明が理解できなくとも自分の手元には日本語の説明があるという、理解のための保証がある（ただ、観察期間中に英語理解の困難からワークシートを見返さなければタスクに取り組めないという児童は見られなかった）。また全体場で提示するスライド中にキーワードを両言語で載せ、教員の日本語での説明を省くという方法も見られた。

このように、教員が戦略的に適宜日本語を用いること、さらに教室内の言語使用をコントロールしないことで、日本語と英語の境界が意識されず、複合的に混ざった状態そのものが1つのレパートリーと捉えられる、トランスランゲージング（Garcia and Wei, 2014）の概念が実現されている教室空間となっているのである。そこでは児童が自由に自身の言語レパートリーを用いてコミュニケーションを行うことが許容、そして肯定されている。

## 児童はこの授業をどう捉えているのか

1年間の最終授業で実施した児童への質問紙調査では、授業への好意、英語の理解度、授業の達成感ともに高い平均値が見られた。特に自由記述の「英語で授業を受けることについて」から見えてきた児童の感覚が興味深い。120名中9名しか「英語が難しい」としていなかったが、英語の理解度を測る質問項目においても理解困難を示したのは2名だけであった。それ以外では、「英語も一緒に学べて一石二鳥」「まるで留学しているよう」「将来英語を使って何かするときに役立つ」などの英語で学ぶことに意味を感じているものや、「英語がわかるようになっていっているを感じる」「難しい時もあるけど英語の力がつくと思っている」といった英語力への影響を示唆する肯定的な記述が見られた。さらに、「今まで英語で授業を受けていると考えたことがなかった」「普通の授業で楽しい」「英語で受けてもあんまり変わらない」というように、英語という媒介言語自体を意識せずごく自然に授業を受け入れていることも窺えた。トランスランゲージング環境を守ることで、児童に不必要な不安や困難、混乱要素を与えることを回避し、さらに最終目標であるプログラミング技術の獲得も達成されている授業であることがわかる。言語習得だけにとどまらない外国語での学習という観点から、今後英語学習が進んだ段階における小学生の次のステップとしての可能性を示唆している実践である。

## 引用文献

García, O., & Wei, L.(2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. Palgrave.

松尾 由紀（立命館中学高等学校）